

絵本を媒介にした対話に現れる子どものことばの力と支援者の役割

—日英二言語習得の幼児の事例—

秋山 幸 (早稲田大学大学院日本語教育研究科 院生)

1. 研究の背景と目的

幼児期の子どもは、親などの身近な支援者とともに、文字認識が可能になる以前に、日常生活の中で、絵本を介した対話を体験していく。Simpsonら(2015)は、家庭内言語と教育言語が異なる子どもにとって、家庭での絵本を介した対話、文字や数字に関する対話などが、リテラシー形成のための実践であると捉えている。こうした実践において、子どもの支援者は、質問者が答えを知っている質問、聞き手が答えを知っている質問などを行うことで、対話をコントロールしていく(Heath, 1983)。子どもの発話がこの対話スタイルから逸れた場合、その対話は意味をなさないものなのかというのが本研究の問題意識である。

このため本発表では、家庭の日常生活において、複言語の幼児と身近な支援者が行う絵本を介した対話のうち、絵本から離れた過去の体験に関する対話に焦点をあて、対話が絵本から離れる際、子どものことばの力がどう発揮され、また、支援者はどう関わっているかを探ることとする。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

幼児が家庭で養育者と絵本を介して行う対話活動では、横山(2004)が絵本から離れた過去の体験に関する対話に注目している。横山は、こうした対話展開を「母子のコミュニケーション」(同：76)であり、絵本の内容を「幼児の個人的な体験に置き換える活動」(横山, 2004：83)として捉えている。「二次的ことば」(岡本, 1985)を絵本世界とし、「一次的ことば」(岡本, 1985)である絵と母親の音声言語を借りた活動と考察している。

本研究では、絵本から離れた対話は、支援

者からの一方向的な助けによって進行するのではなく、子どもから支援者に向けての「会話形式の相互交渉」(岡本, 1985：52)によっても進行すると考える。絵本から派生する子どもの過去の体験には、体験時と言語化がそれぞれ異なる言語で行われる場合があること、幼児にとって体験を言語化することの意義を検討する。活動の文脈から逸れた対話から、複言語の子どもがことばの力を培うための支援の一方法を提案することに本研究の意義があると考えられる。

3. 研究方法

カナダの英語圏で、日英二言語を使用する一家庭に調査協力を依頼した。調査は、2015年12月に実施した。日常の絵本を用いた活動を対象とし、子ども(4歳)と母親、子どもと調査者(発表者であり子どもの伯母)による対話をICレコーダーに録音した。子どもと母親の活動は調査者が参与観察した。

本調査では、言語環境を整えにくいほうの言語による活動に重点を置くため、母親の言語(日本語)による活動を調査対象とした。

分析は、音声データを文字化し、会話分析の手法を用い、対話が絵本から外れるきっかけを見出し、そこに支援者がどのように対応し、子どもの発話のどこにどのようなことばの力が表出されているかという観点から分析を行った。

延べ6冊の絵本による活動記録のうち、3冊(2冊が日本語、1冊が英語)において絵本から離れた対話が認められ、これらの会話をデータとする。絵本を使用する際、支援者(母親または調査者)は文を読みあげることせず、日本語で対話を進めた。

4. 分析と考察

この活動で、子どもが絵本から離れて4つの過去の体験を言語化した。このうち、2つの体験は母親が子どもに持ちかけ、ほかの2つは子どもが調査者に話し始めたものである。

4.1. 絵本の文脈を外れた対話のはじまり

絵本を離れた4つの過去の体験の言語化は、子どもが支援者の予測から外れた発話をする事で始まり、支援者の「受け手に合せたデザイン」(サックスら、2010)によって進行する。子どもの発話が大人の発話の意味を変化させる「声同士の動的変化」(ワーチ、2004: 123)を起こしている。

4.2. 対話に表出する子どものことばの力

4つの過去の体験は、支援者が(一部を)知らない情報であり、「特定の現実の行動のレベルを離れて」(岡本、2005: 164)ことばに置き換えられていた。このとき用いられた言語は、体験時に言語が介在しない場合、あるいは、英語での体験をした場合があり、日本語で言語化されていた。

体験の一部を共有した相手との対話では、相手の認識に補足や反論をし、これに続けて双方向的にやりとりをすることで体験の言語化が図られていた。これは、「一次のことば」での「会話形式の相互交渉」(岡本、1985: 52)という展開がなされたものである。

支援者と共有していない体験は、まとまった談話として報告された。支援者は、子どもの体験の状況が類推可能であったため、支援者からの質問形式の相互交渉は行わず、子どもの談話進行に伴走者の役割を果たした。つまり、子どもが「一方向的自己設計」(岡本、1985: 52)によって発話を構成し、「ことばの文脈」(同: 52)に頼った言語化を図る「二次のことば」の特徴が現れた。

こうした「二次のことば」の特徴は、学齢期において「特定の親しい人」(岡本、1985: 33)から「未知の不特定多数者」(同: 51)へ向けて可能となる。本調査においては、「特

定の親しい人」に対して「二次のことば」の特徴が表出されており、子どもの「二次のことば」への準備過程を見ることができた。

5. 結論

子どもにとって支援者は「特定の親しい人」であり、子どもが絵本を介した対話から逸れた発話をした際に、子どもに「合せたデザイン」による対話を行うことで、子どものことばの力が表出し、培われていくと考えられる。

子どもが話す過去の出来事が、目標言語と異なる言語で起きた場合、子どもの目標言語での言語化は、支援者が子どもの発信に伴走者としての役割を担うことで、言語間の橋渡しも実現させ得ると言える。

【引用文献】

- 岡本夏木(1985)『ことばと発達』岩波新書
岡本夏木(2005)『幼児期一子どもは世界をどうつかむかー』岩波新書
サックス, ハーヴェイ・シェグロフ, エマニュエル・ジェファソン, ゲール (2010)『会話分析基本論集』西阪仰訳 サフト, スコット訳協力 世界思想社
横山真貴子 (2004)『絵本の読み聞かせと手紙を書く活動の研究—保育における幼児の文字を媒介とした活動—』風間書房
ワーチ, ジェームス V. (2004)『心の声』田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳代子訳 福村出版
Heath, S. B. 1983. *Ways with Words: Language, life, and work in communicates and classrooms*. Cambridge: Cambridge University Press.
Simpson, B. A., Kibler, A. and Palacios, N. 2015. “Yo te estoy ayudand; estoy aprendiendo también/ I am helping you; I am leaning too:”A bilingual family’s community of practice during home literacy events. *Journal of Early Childhood Literacy* 2015, Vol. 15(2), pp. 147-176.